# FD NEWSLETTER

CONTENTS


- 雑感・新型コロナウイルス感染症とオンライン授業
  —大学授業とキャンパスの役割—
  教務部長　文学部教授　中野　達哉
- 令和２年度公開授業の実施について
  ■令和２年度「公開授業」を参観して
  総合教育研究部准教授　三好　俊介
- 「機材へのこだわりのすすめ」
  ＧＭＳ学部講師　平井　辰典
- 令和２年度第１回ＦＤ研修会報告
- 学生が選ぶベスト・ティーチング賞
  受賞科目発表
- ＦＤ推進委員会の今後の活動予定


## 雑感・新型コロナウイルス感染症とオンライン授業

## ― 大学授業とキャンパスの役割 ―

**教務部長**
**文学部教授　中野　達哉**

令和２年１月 16 日に日本で初めて新型コロナウイルス感染症の感染者が確認され、その後流行・拡散し、およそ一年となる。この間、本学では、令和元年度の学位授与式（卒業式）は中止し、学位記の交付のみを教場に分散して行い（参加学生 69.5%）、令和２年度前期は４週間遅れての授業開始、実施した前期授業はオンラインとなった。後期に入り、一部のみ対面授業が始まったが、全科目数の 17%にとどまり、オンライン授業との併用であった。

新型コロナウイルス感染症の拡大によるオンライン授業の実施は、予防対策から急遽始まったものであるが、新たな授業の可能性を考えさせるものであった。また、1 年間実施するなかで、オンライン授業のメリット・デメリットともに浮かび上がってきた。反復学習のやりやすさ、有効な時間の活用などがあげられ、さまざまな形での教材の提供による理解しやすさなども指摘されている。しかし、一方で、教員・学生の不慣れさや環境の悪さから十分な活用ができないことや、物足りなさを感じる声なども聞こえている。そして、大学に来ないことによる不安や孤独感を感じる学生もいた。大学に通うことにより、自分の存在、生きていることを確認していたのであり、それを失うことにより、心の問題が顕在化した。

大学での教育・生活のもつ大きな役割に、一般教養や専門的な知識・技術を習得することとともに、人間力を形成していくことがある。ここでいう人間力とは、人として生きていく力であり、人と交わる中で生きていくために必要な協調性・他者との交渉力、社会への対応力のことである。それは、人と直接接することや、大勢のなかの一人として自分を置くことによって育まれていく。オンライン授業だけで、それを十分に行うことができるか懸念される。大学の４年間は、人間形成にとって重要な時期である。人間形成の場として大学という場所が必要であることをあらためて感じさせられた。

皮肉なことではあるが、コロナ禍が契機となり、大学での教育も多様なものへと大きく転換していくことになるであろう。大学で何を身につけるのか、学生にとって必要な大学のあり方や大学が果たすべき役割があらためて問われている。

## 令和２年度公開授業の実施について

令和２年度「公開授業」を以下のとおり実施した。「公開授業」は、授業改善のための教員による相互研鑽を目的とし、工夫に富んだ授業に接し、その体験によるさまざまな発見を通して、今後の授業改善のためのヒントを得ることにある。

公開授業は、各学部等のＦＤ推進部会のご協力により、各学部等主体にて実施された。

| 学部 | 担当教員 | 実施日 | 時限 | 教場 | 科目名称 |
|---|---|---|---|---|---|
| 仏教学部 | 石井　公成 | 12/18（金） | 1 | オンライン | 韓国仏教史 |
| 文学部 | 三樹　陽介 | 12/22（火） | 3 | オンライン | 国語学研究Ⅱ |
| | 川崎　浩太郎 | 12/24（木） | 2 | ３－７０４<br>（オンライン併用） | ３年次ゼミ |
| | 田中　靖 | オンデマンド | | オンライン | リモートセンシングＡ |
| | 小泉　雅弘(主担当)<br>太田　喜美子<br>佐々木　真<br>中村　淳<br>角道　亮介<br>村松　哲文 | 12/9（水） | 4 | ３－２１１<br>（オンライン併用） | 博物館実習（館園） |
| | 長尾　譲治 | 12/4（金） | 5 | オンライン | 社会保障論 |
| | 岩城　達也 | 12/17（木） | 1 | オンライン | 心理学概論Ⅱ |
| 経済学部 | 堀内　健一 | 12/9（水） | 2 | オンライン | 経済理論・資本の原理ｂ |
| | 髙野　学 | 12/17（木） | 1 | オンライン | 原価計算論ｂ |
| | 松本　典子 | 12/8（火） | 1 | オンライン | 非営利組織論ｂ |
| 法学部 | 崔　佳榮 | 12/7（月） | 4 | オンライン | 政治学基礎 |
| | 奥　忠憲 | 12/4（金） | 3 | オンライン | 憲法 |
| 経営学部 | 山邑　紘史 | 12/2（水） | 2 | オンライン | 経済政策 |
| | 中野　香織 | 12/16（水） | 4 | オンライン | 市場戦略概説Ｂ |
| 医療健康科学部 | 新井　知大 | 12/14（月） | 2 | オンライン | 放射線関係法規 |
| ＧＭＳ学部※ | アシュウェル、T. | 12/14（月） | 3 | ３－３０４ | 英語科教育法Ⅰｂ |
| 総合教育研究部 | 河谷　淳 | 12/8（火） | 5 | オンライン | 宗教哲学 |
| | 西村　祐子 | 12/11（金） | 2 | オンライン | 英語ＩＡｂ |

※ＧＭＳ学部＝グローバル・メディア・スタディーズ学部

## 令和２年度「公開授業」を参観して

総合教育研究部　准教授　三好　俊介

令和 2 年 12 月 24 日（木）2 時限（3－704 教場）、文学部英米文学科の川崎浩太郎先生による『3 年次ゼミ』を参観させていただいた。コロナ禍に対応して対面にくわえ遠隔生中継（Zoom 使用）も行う、いわゆるハイブリッド型授業である。実際、遠隔で参加する学生もおられ、私も研究室から Zoom で参観した。

広めの教場内、やや後方のカメラから中継される教壇や室内の一部の映像は臨場感があり、マスク着用や着席間隔などの安全対策がとられているのも明らかだった。川崎先生は授業前には自ら、さらに授業中には学生に依頼して、Zoom での参加者も確実に入場できるよう折々チェックを行われていた。

遠隔参観でも疎外感を覚えないので驚いたが、その理由としては、教員の話し方が早口でなく明瞭であること、そして、その日の授業の進行の仕方と大まかな内容が冒頭ではっきり予告されることが大きいだろう。取り残されるかもしれないという不安が除かれ、リラックスして授業が聴けるのである。

この日の授業の内容は、アメリカの詩人ラングストン・ヒューズの詩を読みながら、アメリカにおける人種・民族問題を考察するというものだった。冒頭 30 分が教員による概説、ついで 2 名の学生がそれぞれ約 30 分の報告（活発な質疑応答を含む）を行う形式である。ゼミの名にふさわしく、教員や学生間の信頼関係のうかがえる、真剣な中にも笑顔の絶えない授業であった。

詩はいわば「言葉足らずの芸術」、つまり最小限の言葉で最大の効果を狙う芸術なので、一篇の詩に触れると行間や背景、一語一語の含意についてさらに知りたくなる。この授業では詩歌が本来もつこの特性がうまく生かされていて、やはり外国詩を専門とする私も啓発されるところが多かった。ヒューズ詩篇の一行「私だってアメリカなのだ」から、話題は米国の公民権運動やその背景へと拡がり、さらに学生の報告はジャンルの枠を颯爽ととびこえて映画論も交え、異文化共存という普遍的な視点から教員の解説を発展させていた。

「人種・民族問題を考えるとき、『差別』という一言でくくって問題を単純化してはいけない。そこには様々な感情や問題が含まれるのだから」という趣旨の、川崎先生の指摘が印象に残った。言葉を大切にして掘り下げるのは詩の授業の醍醐味だが、加えて、単純な言葉にのみ頼って思考停止することの危険性はまさに現下の米国社会の混乱が示すものだけに、先生のこの指摘は学生の心にも響いたに違いない。「たとえ差別が残存しようとも、そこから新たな表現が生まれ、少しずつ社会を変えていく。私はそれに注目していきたい」――質疑での学生のこの応答には感銘を受けた。参観してよかったと心から思った次第である。

困難な状況下でも丁寧かつ創意にみちた授業が行われているのを知り、身が引き締まると同時に、勇気づけられる思いがした。川崎先生と学生のみなさんに感謝申し上げる。

## 連載企画：よりよい教育のために

### 「機材へのこだわりのすすめ」

グローバル・メディア・スタディーズ学部
講師　平井　辰典

ノートパソコン 1 台あれば、内蔵カメラ/マイクによるビデオ通話（会議）からスライドの画面共有によるオンライン授業までできる便利な時代になりました。2020 年、コロナ禍により半ば強制的に、急遽そういったディジタルデバイスの活用を強いられた教職員の方も大勢おられることかと思います。そのような中で、我々は 2020 年 5 月頃の「なんとかオンライン講義ができた」という段階から「質の高いオンライン講義」へとステップアップさせていくことが求められています。

その気になればスマートフォンを使って会議や授業に参加をすることも可能ですが、画面が小さかったり、カメラが安定しないなどの問題があることはご存じかと思います。同様に、こだわりのある機材を使った高品質の配信を当たり前と感じている人にとっては、ノートパソコンのみによる配信は画質、音質の悪さが気になってしまい、場合によっては話の内容に集中できないといったことすらあります。講義を配信する側の配信環境については、可能な限り質を上げておく必要があります。

受け手側である学生に関しても同様に、授業を受ける際の画面のサイズや通信環境の質が高ければ高いほど望ましいわけですが、受講者全員の環境を一律に向上させるにはそれ相応の経済的な援助をする必要があります。学生側への支援も今後の課題として検討していくべき項目です。一方で、配信側の教員の環境に関しては各教員が対応するだけで済む上に、それにより質が向上する講義の数は多いため、得られる効果は大きくなります。実際、多くの参加者がいるオンライン会議において発言者の声が聞き取りづらい場合、会議全体の進行に支障を来すことがあることはこれまでの経験からある程度認識が広まっていることと思います。

これと同じことが講義において起こってしまっているとしたら、至急改善する必要があります。また、少しでも質が低い配信環境となっている可能性があるとしたら、より良い環境へのステップアップを検討すべきです。

以下に、私が今年度導入した機材を効果があった順に挙げます。

１.マイク、オーディオインタフェース

配信の音質が向上し､学生からは Meet を使いながらも Zoom を使っているような高音質になっていたという評価を得られました。これらの機材にあわせて Zoom を使えば、さらに高音質の配信を実現できます。私が使っているマイクはAudio Technicaのコンデンサマイク、AT4040（3 万円台後半）と同じく Audio Technica のダイナミックマイク（1 万円程度）で、講義向きなのは余計な音を収音しすぎないダイナミックマイクの方です。オーディオインタフェースは、元々使用していたものは Steinberg の UR22（1.5 万円程度）だったのですが､ノート PC で動かす際にバスパワー不足で動作が鈍ることがあったため、より新しい型の UR44C（3 万円程度）にアップグレードさせたところ、快適な配信が実現できるようになりました。

２.カメラ

講義をしている教員の表情は、必ずしも重要なものとは限らないのですが、ここで綺麗な画を見せられるだけで、学生側からは「この先生は機材へのこだわりがある」と安心感を与えることができます。カメラは Logicool などの Web カメラでも十分な解像度があるため、配信する上でまったく問題はありません。そもそも Meet で配信できる画像の品質が 2020 年 1 月現在で最高でも 720p、最低の場合 360p となっており、必要以上の解像度の映像で通信することはできません。とはいえ､ノート PC 付属のカメラの場合､画角の調整などが困難なため、少なくとも外付けの Web カメラを導入することをおすすめします。私の場合は、扱いやすい Web カメラも使っていますが、より質の高い映像を撮るために、ミラーレス一眼レフカメラを導入しています。カメラはこだわりすぎるとあまりに高価なものとなってしまうため、私の場合は、比較的安価な 6 万円程度の入門者向けのミラーレス一眼を導入しました。それに合わせて、長時間の講義を配信するために必要な予備のバッテリーや、追加のレンズ、卓上三脚なども導入しています。一眼レフカメラを使うと、レンズの被写界深度に応じた独特のボケ感が出るため、解像度が低い配信でも、映像の質感は向上します。

３.照明

人の顔を被写体とする場合に非常に重要な要素が照明です。顔に照明を当てることで、顔の印象をはっきりとさせることができます。私の場合は、カメラの三脚機能も兼ね備えたリングライト（1 万円程度）を導入しています。

４.ビデオスイッチャー

ここからはあまり効果が上がらなかったものの紹介です。後期からハイブリッド型の講義を実施するにあたって、複数のカメラを切り替えられるようにするビデオスイッチャーを導入しました。一眼レフで撮影する教員の顔､教場を後ろから撮影する俯瞰用のカメラ、講義内容のスライド映像を流す PC 出力の３つの映像をスイッチャーで切り替えられるような配信環境を構築しました。それに加え、音響機材も持ち運び可能な小型のオーディオインタフェースとマイクによって整備するという試みを行っていたのですが、まずセッティングと片付けにそれぞれ 30 分ほどかかるという問題と、さらに大きな問題として、ノート PC の USB ポートから得られる電力（バスパワー）では、これらの多くの機材を同時に動かすためには不足しており、講義の途中で音声が途切れがちになるなどのトラブルが起こるようになりました。また、スイッチャーによる映像の切り替えは、それを行う専用のスタッフがいなければ、講義と両立させることはほとんどできず、使用頻度は極端に低いものとなりました。何度かの試行錯誤の結果、スイッチャーを使うことは諦め、ミラーレス一眼とオーディオインタフェースだけのコンパクトな配信設備によりハイブリッド型の講義を実施することで落ち着きました。

他にも、オンライン講義を行う上で役に立ったのが、Comment Screen というソフトウェアです。これは、参加者によるコメントが画面上にニコニコ動画のコメントのように流れていくというソフトウェアです。Meet にもチャットはありますが、匿名でないため書き込みがしづらいという点や、講義中だと教員側からは気づきづらいといった問題点があります。このソフトを導入してから、受講者から非常に多くのフィードバックを得られるようになりました｡オンライン講義の場合、教員からの一方向な講義となりがちで、きちんと届いているのかが不安になることがあります。Comment Screen の導入により､スライドの映像が固まってしまったときや､私が Mute を解除し忘れて話を進めてしまっていたときなどに、学生側からも気軽に指摘できるため､問題への対応が円滑にできるようになりました。

今回紹介したものは、あくまでも私が実際に使用している配信環境の例であり、より良いものや、目的によっては他にも必要なものなどもあることかと思います。少なくとも言えることは、何も装備をしていないノート PC 一台でオンライン講義を乗り切ってきた方には、より高品質な講義を実現するために、機材にこだわっていただいた方がいいということです。自身の講義の質をリアルタイムでモニタリングすることはなかなか難しいことですが、講義の録画を確認することで、自身の講義を客観的に振り返ることができます。自身の講義の反省点を見つけて改善するという試行錯誤を通じて、より質の高いオンライン講義、ハイブリッド型講義の実現を目指していく必要があります。今回は「機材」という観点でのみ紹介をしましたが、他にもオンライン講義の質を向上させていくために効果的な様々なツールやその活用法があります。今後の FD 推進活動では、そういった新たな技術について積極的に扱っていくべきだと考えています。

## 令和２年度 第１回ＦＤ研修会報告

春からオンライン授業を余儀なくされました。夏になりましたが、いつ対面授業に戻るかも不透明でした。本来近くにいるはずの学生や同僚の先生もいません。他愛もない雑談さえできません。

「この状況では、情報交換が意味を持つのではないか」そう考えた第１回ＦＤ研修会は、令和２年９月３日（木）14:00 よりオンライン上（Google Meet）で開催されました。取り上げられたものは、双方向型オンライン授業です。さらに、オンライン授業の際にも、対面授業に戻った際にも活用できる LMS（学習支援システム）を取り上げました。おかげさまで、今回はここ数年では最多の 164 名の参加となりました。

情報交換のハードルをさげるために２部構成にしました。話のきっかけとして、第１部を講演形式として設定しました。「オンライン授業実施の事前準備と事例紹介」のタイトルで、C-Learning の活用については仏教学部の藤井 淳先生から、YeStudy の活用については経営学部の西村 和夫先生からご講演賜りました。お二人ともそれぞれのシステムに精通している先生です。次に、第２部「オンライン授業に関わる情報交換会」を参加者の皆様とともに座談会形式で行ないました。「オンライン授業のメリット ・デメリット」「オンライン授業あるある」「TIPS」を議論しました。テーマをしぼらず話を広げたわけですが、フロアの皆様方のご協力のおかげで、様々な角度から有意義な質疑応答がなされました。

最後には、ＦＤ推進委員会で練られた LMS 活用法をまとめた「LMS を活用した従前の対面型授業の実施方法について」も紹介されました。

アンケートからは様々な要望や満足をうかがうことができました。もし一つでも有意義な情報が得られたとすれば、ご登壇・ご参加くださった皆様のご協力によるものです。ありがとうございました。

注：当日の動画は 2021 年１月７日（木）まで学内で公開されました。このため、主催者側の主観的な内容の報告としました。

（小野瀬　拡）

## 学生が選ぶベスト・ティーチング賞受賞科目発表

学生が選ぶベスト・ティーチング賞は、2020 年 11 月２日（月）～11 月 21 日（土）に C-Learning による投票が行われ、2,943 票が集まりました。(有効票 2,867 票)

12 月７日（月）の学生 FD スタッフによる会合、12 月 11 日（金）開催の FD 推進委員会小委員会の推薦を経て、12 月 18 日（金）開催の FD 推進委員会にて以下の６科目の受賞が決定いたしました。

＜全学共通科目＞
「心理学」小野洋平先生（文学部・非常勤講師）
「日本の文化と社会」加藤之晴先生（総合教育研究部・非常勤講師）
「自然環境論」持丸真里先生（総合教育研究部・教授）

＜専門教育科目＞
「刑法総論」富樫景子先生（法学部・講師）
「経営戦略論」中村公一先生（経営学部・教授）
「行政法」髙田実宗先生（法学部・講師）

令和３年１月 19 日（火）16 時より授賞式開催を予定しておりましたが、緊急事態宣言の発令により式典の実施は見合わせ、ＦＤ推進委員会委員長の長谷部学長より受賞者へ賞状およびトロフィーを授与いたしました。

## ＦＤ推進委員会の今後の活動予定

○令和２年度第２回ＦＤ研修会
　令和３年２月 18 日（木）16：00～
○令和２年度第７回ＦＤ推進委員会小委員会
　令和３年２月 25 日（木）14：00 ～
○令和２年度第５回ＦＤ推進委員会
　令和３年３月 10 日（水）14：00 ～

※ＦＤ活動についてご意見がありましたら、各学部等の小委員会委員までお申し出ください。

## 編集後記

『FD NEWSLETTER』第 64 号をお届けいたします。
巻頭言は、教務部長の中野達哉教授にご執筆いただきました。コロナ禍に伴うオンライン授業について述べていただきました。この激動の一年間について振り返り、今後の大学のあり方について改めて問題提起をしていただきました。
本号では、公開授業に関する記事を掲載し、文学部英米文学科の川崎浩太郎先生による『3 年次ゼミ』の様子を三好委員から紹介いたしました。リモートによる公開授業への参加という初めての試みについて、その様子や講義への工夫を紹介しました。また、連載企画「よりよい教育のために」では、私、平井が機材へのこだわりについて紹介いたしました。
教育環境が急速に変わった中で、各教員がいかに創意工夫をしているのかが垣間見えるような内容となっており、今後さらにＦＤ活動の重要性が高まっていくことを予感させるコンテンツとなりました。
次号の「FD NEWSLETTER」では、恒例の「学生による授業アンケート」(後期) について掲載を予定しております。

（平井辰典・三好俊介）

※駒澤大学ＦＤ（Faculty Development）ホームページは、以下 URL か QR コードからアクセスできます。

【URL】https://www.komazawa-u.ac.jp/about/fd/

駒澤大学 FD 憲章

一、 私たちは、常に新しい教育方法を模索し、教育活動の質の向上に努めます。
一、 私たちは、常に自らの教育方法をふりかえることで、教育活動の改善に努めます。
一、 私たちは、常に教員相互の情報交換をすることで大学全体の教育の質の向上に努めます。
一、 私たちは、常に学生、または社会からの声を大切にし、教育活動の改善に努めます。
一、 私たちは、知を人類の資産として未来へ継承し発展させるよう、学生とともに歩むことを誓います。

**【タイトル横の写真は、種月館（３号館）から見た本部棟】**

**FD NEWSLETTER JAN. 2021 第 64 号**
発行日：2021 年 1 月 30 日
発行者：駒澤大学ＦＤ推進委員会
〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1
TEL 03-3418-9444　Fax 03-3418-9114
（事務局：教務部）